

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號二第卷十五第

月二年五十和昭

## 論叢

支那の小作制度……………經濟學博士 八木芳之助

近世後期の經濟思想……………經濟學博士 本庄榮治郎

勢力としての價格……………文學博士 高田保馬

## 時論

租稅制度改革批判……………法學博士 神戸正雄

## 研究

山西票莊……………經濟學士 鈴木總一郎

ハンセンの人口論に就いて……………經濟學士 青盛和雄

## 說苑

鮑屑錄……………法學博士 財部靜治

## 附錄

彙報

外國雜誌論題

# ハンセンの人口論に就いて

青 盛 和 雄

## 一 緒 言

曩にハンセンの傳記を考察し來つた吾々は、茲では其の著作“Die drei Bevölkerungstufen”を解題しようと思ふ。

夙にロツシユの指摘せる所に依れば、ハンセンの書物の内容は云はゞ無盡藏と稱すべき程に多彩なる問題を展開して居り、頗る暗示に富んで居ると見做され、従つてこの著作は餘りに思索的なるが故に、簡単に全篇の概要を述べ盡くすことは出来ないのである。されば爾來五十年の星霜を閱する間に少からぬ評論がこのハンセンの著作に對して試みられた中に、斯説の鵝呑か吟味に終始して了はないで、克く問題の骨子を把握し、云はば其の醍醐味を知り得た者が果して幾人あつたらうかと疑ひなきを得ないのである。

斯くて元來甚だ評價され難いと見做さるべき本著が、この解説に依り直ちに誠に賞讃に値するものとして誰にも容易に理解され得るに至るであらうとは期待出来ない迄も、少くとも既往の解題の過程に於て躓きの右ともなつた諸家の見解の所在を明瞭にすることは可能であらう。唯解題の目的上間接にハンセンの所説に就いて語られ

1) 拙稿「十九世紀末葉の人口論者ハンセンに就いて」、經濟論叢、昨年十月號。  
2) Jb. f. Gesetzgeb. Verw. u. Volksw. im Deutschen Reich, Jg. 40, Lpz. 1890. S. 1000. Litteratur-Besprechungen, (Hansen Georg: Die drei Bevölkerungstufen, München 1889) von Hermann Losch.

\* 岩波西洋人名辭典昭和七年版1392頁 Antonius の意より轉用す。

てゐることばかりを述べたのでは、徒らに甲論乙駁を續ける結果となり歸一する所を知らず、遂にはハンセンに似て非なる別の人形を拵へる恐れもあるので、吾々は先づハンセンの人口論の要旨を其の源泉に於て考察するであらう。

## 二 ハンセン人口論の要旨

凡そハンセンには如何なる思想の流入があるかを詮索する餘裕のない人々の爲には、先づ彼が其の著書中に引用せる文獻は大別して經濟學及び統計と歴史とより成り、従つて彼の人口論が人口周流といふ特定なる理論と其の史的舉證並びに人口政策の基準を説くにあつたと謂へばいゝであらう。

茲では唯その中で人口理論のみを問題とし、而も所謂の政治算術學派以來の人口周流といふ歴史的なる命題に<sup>1)</sup>は直接に觸れないで、唯マルサスを前提にして出發して居るハンセンの都市人口二代更新の説明のみを掲げる。これこそ其の後の論評の標的であり、斯説を取るか捨てるかの關ヶ原であるからである。

ハンセンは其の著の開卷蟹頭の第一章に於てマルサス説に依據して曰ふ。<sup>2)</sup>

「食糧の増減が人間の自然的繁殖力に影響することが確認されるれば、或ひは人口問題は解消するかに見えるが事實は然らず。凡そ如何なる事情に於ても一婚姻當り産兒数は依然として同一なる筈だから、國民増殖の結果として生ずる次の問題に對して如何なる方策を樹立すべきであるか。誰は結婚し得るが誰は結婚し得ないのであるか。誰が或者には許して居る所の種族の繁殖を他者に拒否するのであるか。マルサスはこの論究に際して常に國民を全體としてのみ觀察せるに過ぎなかつたから、吾々は繁殖率に就いて相異なる關係に置かれてゐる國民を、夫々の社會成府に區別して検討するであらう。」

斯くて都鄙人口周流を農民層と都市中流層並びに都市勞働層といふ人口三段階に認めたハンセンは、結局に於

3) 高田保馬「人口に關する小論」、經濟論叢、昭和八年一月號三十七頁參照。  
2) R. Kuczynski; Der Zug nach der Stadt. Stuttgart 1897. Beilage I. Die Ansichten der politische Arithmetiker über die Frage des Absterbens der städtische Bev. und deren Ersetzung durch die ländliche (1661-1762). 拙稿「十七八世紀の都鄙人口周流に就いて」、第一回人口問題協議會報告書參照。

て農民層には殆ど一世代で人口倍加する自然増殖力を想定し、都市中流層には死亡超過に基づく人口減退を、勞働層には自力を維持する定滯人口を認めたと謂へるであらう。此の間の關係をハンセンの敘述に則して云へば一體全體 ein geborene Münchner 「生粹なる民顯人」は果して存在するかとの話題を發端とし、民顯市では一八八〇年に住民千人當り三七五人の市内生が居たが、バイエルン地方人口調査にては年齢と出生地別との組合せなきを遺憾とし、爲に鋒先を轉じて一八七五年十二月一日の萊府市の人口統計に於て、十五歳以上の成年人口中の二三・五三%は市内生であり、七六・四七%は市外生であつたとの事實から、次の如き推定を下して居る。<sup>2)</sup>斯る個別の事例の一般化が可能なりや否やは問題であるが、我國に於ても人口靜態統計に依る來住者割合は類似して居るから、斯る類推は可能とも考へられる。そこで之を簡條書にして述べて見る。(I) (イ)萊府人口は約二五%の市内生と七五%の市外生の者より成つて居た。(ロ)この市外生の者の中で二五%は唯一時的に萊府に滯在せるものとし、次の二五%を他都市からの來住者の子供として夫々七五%から控除すれば(ハ)其の結果は全體的に見て半分の生粹者と他の半分の來住者となり成る定滯人口が残る。(ニ)蓋し停滯的なる一都市の人口が引續き半分を來住者に依つて占められるとすれば、生粹の人口は二世代にして外部からの來住者に依つて全く更替させられるであらう。

(II) (イ)時と國を同じうする都市人口構成は類似せるものだから、吾々はバイエルン人口に對して萊府人口に於ける比例數を適用し得るであらう。(ロ)バイエルン諸都市人口を都市出生者と郡部出生者とに分ち、之を萊府人口に於ける成年人口割合に基いて推算すれば、都市出生者と來住者の總人に對する比例は三八%と六二%になる。(ハ)扱、この際の都市生とは一都市から他都市への移住を含んでゐるから、來住者の比例の中から一時的に都市滯

2) G. Hansen: Die drei Bevölkerungsstufen, München 1889, S. 10.  
 3) Ebendasselbst, S. 21.  
 4) Ebendasselbst S. 27.  
 5) 拙稿「來住と大阪市人口構成」、經濟論叢、昭和十一年五月號。  
 6) Hansen, a. a. O.S. 28.  
 7) Ebendasselbst, S. 29.

在を續けて居る者の數として二五%を控除すればよい。(二)故にバイエルン諸都市も亦半分の生粹者と他の半分の來住者により成るから、こゝでも都市人口は二世代で全く更新するだらう。

(Ⅲ) (イ)一八七一年から一八七五年に至る五ヶ年間の民顯市に於ける出生死亡は殆んど相等しく、其の期間の年平均人口増加率は約1.25で、斯る人口増加は専ら來住の往住に對する超過で占められてゐた。(ロ)この事から推定され得るのは、民顯市の出生死亡率は夫々約1.40であり、出生數が死亡數で差引される限り、都市人口は自力の儘では停滞を續けるであらう。(ハ)民顯市で婚姻者百人に付き生粹者は二〇人、來住者は八〇人である。一婚姻當り産兒數を同一と見做せば、出生總數の4.5は來住者の婚姻に依る。(ニ)生粹人口の生死差額の計算を純粹にするには、出生數から4.5死亡數から來住者及び其の子供の死亡事例を除去すべきである。併し統計の現状では斯る計算は出來ないにしても、大體の見當では都市生粹者の生死差額勘定は缺損を示すに違ない。<sup>7)</sup>

以上の如くハンセンは都市人口を以て平均的に二世代にして全く更新するとは述べて居るが、同時に又、彼はこの計算の數値に抱泥する者ではない。斯る都市人口更新年代は時と國とを異にするに従つて變動のあることは勿論であると語つてゐるのは注目に値するであらう。要之、この命題の前提が正しければ結論も亦正しいのである。併しこの前提が必ずしも普遍妥當性を有せず、従つて都市人口は常に停滞的ではないといふ批判に就いては後節に於て問題とする。茲では唯ハンセンが何故二世代で都市人口は更新すると言つたかを想像せしむるもう一つの例を掲げるに過ぎない。

マルサスがスタントンに典據しつゝ、「支那人の間には大財産は同一の家に三世代以上は滅多に續かない」と云

8) Ebendasselbst, S. 31.

9) H. Allendorf; Der Zuzug in die Städte, Jena 1901. S. 61.

10) T. R. Malthus; An Essay on Population. Everyman's Library, Vol. I. p. 130. (Staunton: Embassy to China, 1797. Vol. II. p. 152)

つたのは、支那民間に於ける土地財産の相續に際して事實上均分制度の行はれてゐることが人口増殖の傾向を強めたとの意味であつたが、ハンセンに於ては商工業に従事せる都市中流層の急速なる更替を爲す例證としてこの言葉が引用せられたのである。此際注意すべきはハンセンの所謂人口周流とはこの都市中流層が田舎からの新しき來住者に依つて更替させられ、既往の中流層の一部は死滅し、残る部分は勞働層へと沈下することを指稱してゐるのであつて、決してクチンスキーの言ふ如く、<sup>12)</sup>勞働層から中流層への逆流を認めることではない。

ハンセンが人口論を廻轉せしむる樞軸點を人類の生存資料に置くマルサスを前提とし乍ら、<sup>13)</sup>國民を更に三つの社會成層に分けて研究を進めて行く以上、各階層の生存資料獲得手段としての所得を次に問題とせねばならなかつた。即ち農民層には肉體及び精神の總合的勞働に依る自然的なる土地収益を認めて居るに反し、都市中流層には精神勞働のみ、勞働層には肉體勞働のみに依る所の靈肉相分離せる勞働の収益を擧げてゐる。然も所謂の資本収益をも精神勞働の所産とし、單なる肉體勞働が所得を産み得るのは精神勞働のお蔭であると見做す點に於て、マルクスの社會主義的人口論と好き對照を成してゐることは一寸注目すべき事項であらう。

斯る人口の三階級はハンセンに依れば夫々自力に依つて維持される獨自の存在ではなく、實は同一人口の相異なる發展段階にあると主張される。従つて土地所有者層たる第一段階のみが永續的で、第二段階たる都市中流層は前者の作出す餘剩から成立つものであり、第三段階たる勞働層は前二者に依存して居るのであり、又其自身を維持する生産力を認められても居る。然らば最も都市的なる人口としては實に中流層のみが抽出して考へられて居るのであり、第三階層たる勞働層は商業中心都市を取圍む郊外に押し出されて居ることとなる。この事は地域的

- 11) G. Hansen, a. a. O. S. 178. (Stöpel; Bevölkerungsgesetz. S. 162.)
- 12) Kuczynski; a. a. O. S. 97.
- 13) Hansen; a. a. O. S. 40.
- 14) H. Losch; a. a. O. S. 998.
- 15) Hansen; a. a. O. S. 31.

に考察されたる人口集中論とも一致する<sup>16)</sup>。これ人口三段階の推移が流水「Eisse」に都市人口が内陸湖「Landsee」に嘯へられてゐる所以である。<sup>17)</sup>

### 三 アモン及び其他の社會學的評論

扱、ハンセンの人口周流に關しては既述の如くであるから、之が引用度數も多く且つ其の改版毎に見解の相違を示せるアモンの社會學的評論を語らう。彼が最初にハンセンを引用せる著作「人間に於ける自然淘汰」中に於ては、曾て徴兵検査統計の人類學的研究に自信を得てゐたし、更に都市統計中に都會人の廢頽を實證すべき資料を物色せる際でもあつたので、全くハンセン説の利用に吝かでなかつたのは當然である。蓋し之はロツシュの新刊紹介を讀んで云はゞ無批判に飛付いたに過ぎないから、その次の著作「社會秩序論」第一版がハンセンの都市人口二代更新説を其儘に承認せることと共に、反覆絮説の必要はない。

以下主としてアモンの反對せる點を簡單に述べて斯る批評のハンセンに當らざる所以を明瞭にしたい。先づ最初にハンセン説の一般的是認を留保するか如き口吻は次の如くである。「都市人口の更新とは只の數戶の市内生家族の殘存をも許さない程に徹底的なものではない」と稱して、如何なる計算に基くのか不明であるが、「都會人は二代目には四・二%となり、三代目には一%となるから、結局、平均的には二世代で九九%までは都市的自然淘汰の犠牲になる」と語つてゐるかと思ふと、其に次ぐ頁では「都市家族を二世代にして絶滅せしむる原因は精神能力の一方的發展が肉體に災せるにある」として僅か一頁を隔てれば一%の矛盾は看過されて了つて居る。<sup>18)</sup>

16) 拙稿「晝間移動人口論」、經濟論叢、昭和十二年二月號參照。

17) Hansen; a. a. O. S. 32.

18) O. Ammon: Die natürliche Auslese beim Menschen. Auf Grund der anthropologische Untersuchungen der Wehrpflichtigen in Baden und anderer Materielen. Jena 1893.

更にアモンが「國家社會に於ける農民の重要性」を強調せる小冊子中に、「農村地方に採つて餘剰人口の移住が必要である如く、都會でも其の來住が必須缺くべからざるものであり、都市の上流階級は期間經過と共に自力を補給し得ないものである」とし、其際の脚註に於て「新研究に依れば都市相互間の移住關係はハンセンの想定よりも遙かに廣範圍に互る」と云ふ。然るに其の著「社會秩序」第二版に於ては、第一版中の第二十九章「人口周流」を特に書き換へて、『人口周流と都市人口の更新』となし乍ら、内容的には寧ろ反對に人口更新の程度を低く見たる立言を平氣で其の序文中に述べて居る。

「余はハンセン説を本質的に妥當なりと信じて疑はないものではあるけれども、都市人口更新が二世代以内で行はれるといふのは期間に於て些か短か過ぎると考へられる。且ハンセンは都市相互間の人口交換を無視して居るから、この都市人口更新世代年數は更に高められねばならぬ。故に事實に近迫せんが爲には都市人口の平均的滞在期間は三代か四代に延長されねばならぬ。」

以上アモンの批評が自家憧憬に陥つてゐることは、ハンセンが他都市との人口交換を總人口の二五%と規定してゐるのに對し、アモンは一方では都市相互間の移住がもつと廣範圍に互ると云ふかと思ふと、他方では他都市間の人口交換をハンセンが全く無視したと稱するが如き著しい無定見に認められる。さればこの後アモンを批判せるクチンスキーが、「アモンの見解は何等ハンセン説と共通性を有せず。斯様な無證明な命題を主張せんとするアモンのハンセン解釋は學問的に無價値である」と痛烈に駁撃を加へたのは蓋し當然であつた。

斯る批判の後に發行されたる『社會秩序論』第三版こそ最も吾々の興味を引くものであるが、アモンは依然として都市人口更新年代に關しては第二版其儘であり、直接には何等クチンスキーに答へては居ない。併し其後に於ける都市住民の居住状態が改善されたことと、其の結果都會人の健康増進を齎らした過程を語ることに依り、都

- 2) O. Ammon; Die Gesellschaftsordnung und ihre natürliche Grundlagen. Aufl. I, Jena 1895. S. 146. Bevölkerungsstrom.
- 3) O. Ammon; Die natürliche Auslese. SS. 296-297.
- 4) O. Ammon; Die Bedeutung des Baucrnstandes für den Staat und die Gesellschaft. (Preisscift aus dem Wettbewerb der Zeitschrift „Das Land“ 1894.)



市に於ける出生超過の事實を認めては居るものの、猶自説として上下の社會階級に區別せる場合の人口更新を主張して、間接的ながらクチンスキーの駁論に僅かに應酬し得てゐる。「假令統計的實證に基く反駁があつても、斯る論者は恰も森林の全體をぼんやり眺めてゐるばかりで、時間的經過に於ける樹木の變化を察せざるものである」と蓋しハンセンを正しく祖述し得なかつたアモンも、自説を固守せんが爲にはこの至言ありと稱すべきであらう。アモンの爲に何等辯解の必要を認めない吾々も、このハンセン解説に於ける最初の覆轍が次のクチンスキーの批判を乗せた軌道ともなつたことの説明に役立つであらうと思つて之を述べた次第である。序でに斯る關係の傍證となる點を擧げるならば、田舎からの來住が主として第三段階に這入るとなすアモンの誤謬<sup>5)</sup>をクチンスキーが踏襲してゐることであらう。都市來住が第二段階即ち中流層に攝取されるとなすハンセンの主張は實は彼の人口周流理論の核心をなすものでもあつたのである。

然るに都市來住が勞働層に依つて支配的に占められてゐるとの見解は社會學者に共通であるらしいので、其と區別する爲にはハンセンの所謂る都市とは精神勞働に依りて所得を儲けてゐる中流層の住居せる中心城市と限定する必要のあることは既述の如くである。又、チンマーマンがクチンスキーを評して、都市人口増加に於ける來住と自然増加との割合に就いて都人の自然増殖力に期待するの餘り、都市人口増加に於ける來住の割合は減少しつゝありとする樂觀説を代表する者と見做すに對して、ハンセンを以て當時の健康状態に於ては多くの都市は出生に對し死亡が超過せるが故に、若し都市が田舎よりの移住民を收容するに非れば、都市人口は破滅するとの悲觀論を代表させてゐるのは其儘は承認し難いにしても頗る興味深き説明と謂へよう。

- 5) O. Ammon; Die Gesellschaftsordnung. Auf. II. 1896. S. V.
- 6) R. Kuczynski; Der Zug nach der Stadt. Statistische Studien über der Bevölkerungsbewegung im Deutschen Reich. Stuttgart 1897. S. 97.
- 7) O. Ammon, Gesellschaftsordnung III. 1900. S. 122.
- 8) H. Allendorf; a. a. O. S. 11.

茲に於てもハンセンはマルサスの流を汲み、アモンはグーヴィンの後を追ふものでもあるであらうといふことが分る。<sup>10)</sup>併し乍らワイセンフェルス出身のアレンドルフが、ハンセンの説明に於ける最大誤謬は當時既に本質的に支持し難く思はれたマルサスの人口論から發してゐる様に思へると云つてゐるのは、吾々の了解し難い所である。彼は此際に於てハンセンアモン並びにオツペンハイマーをも含めて、之等の理論家達が都市への來住を必然なる自然法則視して居り、遂には同一原因の下に至る處、普遍妥當性を有する法則を樹立せんとするものであると見做して非難してゐる。従つてこの三者は特定社會の本質的特徴を「Festgesetz」[移住の自由]に置いて居るのであるから、若し吾人が自然及び社會の現象を類似的に取扱はうと思ふのであれば、社會なるものが一定の意志活動を爲すものではなく、法則性を樹立し得るものでなければならぬと説いて居る。斯る一般論は兎も角として、吾々は現在も猶進行中の一國人口の都市化過程が國民の文化に及ぼす影響如何を道破せるハンセンの所謂人口周流なる一經驗法則に注意を喚起すれば足るのである。<sup>13)</sup>

#### 四 クチンスキーの統計的批判

一八九七年當時僅かに二十二歳の數へ年に當る若冠クチンスキーが、一六六二年英京倫敦人グロントの一著作以來所謂の政治算術學派の傳統的命題を、云はゞ新しい革袋に容れて老熟せる人口理論を物語つたハンセンに對して、斯くも鋭利なる批判の刃を翳し得たことは頗る感嘆に値することであつた。吾々は茲に英獨再び戦へる今日に於て、英國に鑿鑿たりと聞く同氏にハンセンの舊作の再吟味を申し出でたいと思ふ。何故ならば爾來再び

- 9) P. Sorokin & C. Zimmerman; Principles of Rural-Urban Sociology, N. Y. 1929. p. 526 p. 527 p. 532.  
 10) O. Ammon; Der Darwinismus gegen die Socialdemocracy. 1891.  
 11) Allendorf aus Weissenfels. Allendorf. a. a. O. S. 10. S. 15. S. 16.  
 12) H. F. K. Günther; Verstadterung, 1934. S. 10.

クチンスキーのハンセンに言及せるを知らず、唯奇くもハンセンの歿せる一九一一年に恰度生誕七十年を祝賀してマイヤー教授に捧呈されたる諸論文集の中に同氏と肩を並べて論述を發表せるロツジユが、一九一五年に至つてクレマーがハンセン複刻を出すや直ちに之が紹介の筆を執り、「ハンセンに於ては統計は非常な博識を以て活用せられて居り、其の結論の證明に役立つてゐる」と論じて居る位であるから、この言葉を以て同僚たるロツジユのクチンスキーに報いたる一矢であると思ふべきであらう。

斯くてハンセン説の祖述はクチンスキーの『都市來住論』に於ける統計的批判から検討されねばならぬ。先づ序文中に語る、「ハンセンの著作が示唆に富むとは多くの學者の認むる所であり、發行後數年は諸著述家は全くその影響下にあり、就中アモンは之が傳播と敷衍の役割を果した。若しアモンの如くハンセンに對する好評のみを語らうと思へば、其でも一研究たり得たであらう。即ち都市人口の死滅と農村人口に依る更替を以て結語を粧ふことも容易であつた。併しハンセン及びアモンの統計的證明の成立に對し疑問を懐いたので、敢てこの統計的根據を精密に考察し、結局斯る統計資料の價值と其に依據せるハンセンアモン説が既に一般的承認を受けてゐることが余の疑問を公表せしむる動機となつた」。

斯る論調から判斷すれば、クチンスキーにもハンセン祖述のもう一冊の著述が出来たかも知れないのに、アモン説とハンセン説とを混淆して考へたが爲にこの駁撃の一書が創作されたこととなり、この後の世評が多くはクチンスキーを通じてのみハンセンを論じてゐることは頗る冒険であると謂はねばならぬ。そこで吾々はクチンスキーに於て特に重要と考へられる直接のハンセン批判の要點を掲げるに止めよう。

- 13) R. Heberle u. F. Meyer; Die Grossstädte im Strome der Binnenwanderung, Leipzig 1937. S. 51.  
 1) J. Graunt; Natural and Political Observations upon the Bills of Mortality, edited by Hull. Cambridge 1899.  
 2) R. R. Kuczynski; Population Movement. Oxford 1936.

最初は原住率と人口の「流動性」Ortgeburtigkeit und "Beweglichkeit" der Bevölkerung<sup>6)</sup> に関する問題であつた。批判者に依れば、「ハンセンは都市人口の原住率の僅少から其の流動性の過大を推定してゐるが、總人口に於ける市内生者の割合は決して人口の流動性を計る基準たり得ない」と云ふ。而して伯林人口男子の一八四〇乃至一八九〇年の期間に於ける原住率の不變を其の論據としてゐる。斯の如き移住統計方法<sup>7)</sup>への無理解は次の敘述にも見受けられる。

「流動性の多少は人が出生地を離れることの難易や滞在<sup>8)</sup>地變更の度數等で表現される。若しハンセンが流動性を所謂「郷土愛」"Schollenreue"の<sup>9)</sup> 缺乏だと解して居るとすれば、理解し難い言葉乍ら、都市生の者は田舎生よりも故郷で生活することが少ないといふ點では正しい」と述べて居るクチンスキーは、先に出生地統計に基く原住率は何等個別の移住現象を把握するものにあらずと極言し乍ら、次には何に依つて都會人が田舎者よりも流動性が大有り、従つて都會人に郷土愛の缺乏せることを一般的に決論し得たのであらうか、要之、移住に關する統計調査は靜態と動態の兩方の資料が完備せねば人口の流動性は概観し得られないものだから、次にはハンセンのこの兩方の資料を驅使せる立論に對するクチンスキーの批判を掲げて見よう。

「扱ハンセンの停滯人口なる假設の機軸は全く無證明なので其を度外視すれば、都市人口二代更新に關する主張は或は説明が付いてゐる様に思はれるかも知れぬが、併し一寸委細に調べると斯説は支持し難い。何故ならば若し或る都市の停滯人口が引續き半分を來住者で占められるとしても、原住者が二代以内で絶滅すべき論理的なる必然性はないからである。」

そこで次の問題はハンセンの所謂停滯人口とは何かを説明すべきであつて、クチンスキーの如く之を無視して都市人口の更新が説明し得られる筈はないのである。此の點に關してパロッドも都市人口の五〇%がハンセン

- 3) F. Zahn; Die Statistik im Deutschland nach ihrem heutigen Stand. 1911. Bd. 1. (R. Kuczynski; Eheschliessungen etc. H. Losch; Wanderungsst.)
- 4) H. J. Losch; Allg. St. Archiv. Jg. 9. 1915. S. 746. Literatur d. drei Bev.
- 5) Kuczynski; a. a. O. SS. VII—VIII
- 6) Ebendasselbst S. 8.
- 7) 拙稿「移住統計法」經濟論叢昭和十二年十月號參照

に於ては停滯と見做されては居るが、初めから證明されては居ないと論じて居る。<sup>10)</sup> 私見に依ればハンセンが初め全體としての停滯人口と云ひ、次に停滯せる一都市の人口と斷つてゐるのは理由のある表現であると思はれる。即ち民顯の人口動態に於て停滯を見せてゐたのは都市人口増加でもなければ又往住に對する來住超過でもなく、實に都市人口の生死關係に於てであつた。換言すれば、この期間に於ける都市人口の増加は全く移住關係のみより賄はれて居り、生死差額に基く都市人口増加への寄與は殆んど無かつたのである。されば斯の如く生死關係に於て停滯せる都市が引續き半分の來住者より成るとすれば、土着人口は來住者に依つて次第に置換へられ行くことは單に時日の經過を待つだけの問題であらう。唯、既述の來住超過のみから成る人口増加割合からすれば、都市人口の更新は恐らく二世代で足りると推定せられたに過ぎないのである。

此際に於て民顯市五ヶ年間の生死均衡を示した理由を一八七一年の普佛戰爭並びに一八七二年及び翌年のコレラ流行の結果たる三年間の死亡超過に求めたることは誠に適切なる批判であつた。<sup>11)</sup> 斯る戰爭及び疫病の影響は繼續的ではないから、之を以て都市人口は常に生死關係に於て停滯を續けて居ると論斷することは誤謬であらう。併し乍ら都市人口の増加割合が過半を來住超過部分で占められ、人口總數の半分以上が市外生である限り、原住者の自力のみでは人口増加の割合が鈍ると考へられるであらう。若し之をハンセン流の表現で述べれば、都市人口の増加が來住のみに歸せられる場合に、自力のみに依つては人口は停滯を續けるであらうと云へるに過ぎないのである。<sup>12)</sup> 更に人口段階を都市中流層に限れば茲に初めて大部分は死滅し、残る一部分は無産勞働者及びプロレタリアとなると稱され得るであらう。以上の如き慎重なるハンセンの敘述振りも、一旦之を傳承したる人々に於

8) Kuczynski, a. a. O. S. 9.

9) Ebendasselbst S. 73.

10) C. Ballod; Die Lebensfähigkeit der städtischen und ländlichen Bevölkerung, Lpz. 1897. S. 5.

11) Kuczynski; a. a. O. S. 79—81. (K. Singer, Die Abminderung der Sterblichkeitsziffer Münchens. 1895)

12) Hansen, a. a. O. S. 28. S. 31.

ては遠慮なく一般化されて表現され、來住が停止せる場合には都市人口は死滅するといふ命題として論議せらるゝに至るのである。最後にハンセンが萊府人口の年齢構成割合をバイエルン諸都市に適用してゐることに對するクチンスキーの批判の論點を掲げよう。<sup>14)</sup><sup>15)</sup>

「若しバイエルン王國統計書第三十一冊に基き計算すれば、バイエルン諸都市人口六六三、三九三人の中十五歳以上の成年人口は實際には四九八、六二三人であるのに、ハンセンは之を四四五、二二五人として居る。彼は一八七一年のバイエルン人口に關する研究に於て全くバイエルン王國統計書第三十二冊のみを利用して居り、恰もこの同様なる萊府統計表の引用に際し、『残念乍らバイエルンの統計資料は充分でない』<sup>16)</sup>と述べてゐる。吾々の問題とせる文獻に就いて尠くもハンセンを遺憾に思はしめたことも今や殆んど杞憂となつたと謂ふべきである」<sup>17)</sup>

以上でハンセンの都市人口更新に關するクチンスキーの批判の箇所は全く終つて、次にはソーンレイ・アモンを論じてゐるのである。蓋しこゝでハンセンがハツセの編輯せる萊府市統計書を援用したのはその中で始めて出生地と年齢構成の結合せる充分なる統計資料が見出されたからである。クチンスキーの稱する如く、バイエルンの統計で間に合ふのに萊府市の統計を参照する必要はない。悉言すればバイエルン諸都市の人口統計には年齢別と出生地別とが夫々別卷に發表されてゐるが、クチンスキーはこのバイエルン統計書の何處を探せば都市生と郡部生の年齢比較があるといふのであらうか、ハンセンの問題にしたのはバイエルン諸都市成年人口に於ける都市生と郡部生の者の割合であるから、クチンスキーの取揚足に類した駁撃でハンセンの立論は何等の蹉跌を來すべき筋合ではない。唯折角の注意を活用して考へればハンセンが都市生の中に包含せる他市生の年齢構成は市外生の年齢構成に近似し、皆等しく都市と呼んで居つても、萊府や民顯の如き大都市と其他の中小都市とは、その

13) Ballod. a. a. O. S. 55. H. Bleicher; Statistik I. 1925, S. 117.

14) Kuczynski. a. a. O. S. 282. Allendorf. a. a. O. S. S. 79.

15) Kuczynski; a. a. O. 74.

16) G. Mayr; Die Bayerische Bevölkerung nach Geschlecht, Alter und Civilstand. München 1875. S. 119 auch S. 159.

人口動態も年齢構成も相異なるであらうといふ事實を知るのみである。蓋しクチンスキーのハンセン批判は大體に於て見當外れと稱すべきであらう。唯其の批判の適中してゐるのは寧ろ都市人口更新の計算を獨逸諸都市資料で實證せんと試みたるソーンレイの一著に對してである。其故に Zug nach der Stadt「都市への來援」とは Zug vom Lande「農村からの進軍」<sup>20)</sup>を宛も倒立させた感があるではないか。勿論都市人口の發展が一國人口の發展を阻害し、惹いては國防力の弱化を來すといふ謬見に對するクチンスキーの批判には鑑みるべき多くの點のあることを認めない譯ではない。併し乍ら斯る批判と都市人口増加が主として田舎からの人口周流に負ふとのハンセンの主張とは自ら別問題である。

## 五 結 言

以上ハンセンの人口周流に關する理論の概要を述べ、之に對する批判の大略を語つて之等の多くは斯説への無理解に由來するといふ事實を指摘したのであるが、ハンセンの複製版を出せるクレーマーでさへ、此書は統計資料の性質上誰でも多少の異存を覺えると述べてゐる位であるから、<sup>1)</sup>ハンセンの著作はこれまで祖國の友に餘り注目されてゐなかつたことが窺知されるのである。併し一般に都市が田舎に比して假令其の率は低いにしても、事實上若干の自然増加をなしつゝあるのは全く都會が田舎より新鮮なる人口を吸収しつゝあるお蔭であるとなす命題がハンセンに依りて初めて確立せられた所であり、其の統計的論證に間違がなかつたことが既述の説明で分れば、此書への評價はもつと高められて然るべきだと考へる。

- 17) G. Mayr; Die Bayerische Bevölkerung nach der Gebürtigkeit. München 1876.  
 18) Hansen, a. a. O. S. 21.  
 19) E. Hasse; Heft XI der Mitteilungen des statistisches Bureaus der Stadt Leipzig, 1877.  
 20) Heinrich Sohnrey; Der Zug vom Lande und die soziale Revolution. Lpz. 1894. Kuczynski. a. a. O. S. 75.

ロツシユもこの本の複製版批評に際して、新版刊行までに四半世紀を必要とするとは全く思ひ掛けなかつた所だが、戦争なるものはハンセンの著作の理解を本質的に容易ならしめ且深刻にすると語つてゐるから、吾々も斯る期待を以て更に其時から四半世紀を経過し將にハンセンの歿後三十周年を記念せんとする頃に當つて、このまゝやかなる祖述を彼の墓前に捧げたいと思ふ。

ハンセンを祖述する人々が誰でも認むる如く、ハンセンの人口理論は彼の人口政策と有機的に聯關せるものであるから、後者に就いては次の別論に俟たねばならぬであらう。唯こゝでは昔から人口論の温床である政治算術學派の流れに於て我がハンセンの思想を汲むことが最も適當であると言ふに止めて置かう。何故ならばマルサスからハンセンへ及びせる影響に就いては既に本論に於て多少乍ら指摘せるが如くであり、マルサスが數十回も引用し乍らも其の人口論發表後に入手したき書籍として「神の秩序」を擧げてゐる所のジュースミルヒとこのハンセンとの關聯も亦辿り得るからである。ジュースミルヒがグロントを祖述せることは今更申すに及ばないであらう。従つて政治算術學派の開祖たるグロントが自著の副題、*With reference to the Government, Religion, etc., and the several Changes of the said City* の次に掲げたる羅旬語の章句——*Non, me ut miraretur Turba, laboro, Contentus paucis Lectoribus.*——「余は衆愚の賞讃を骨折り求むるものにあらず、少數の眞實なる讀者で満足する」をこの新しい政治算術學者ハンセンの著作の解題に際して銘記しても差支ないと思ふ。

- 21) Kuczynski; Die heutigen Grundlage der deutschen Wehrkraft, Stuttgart 1900, S. 56.  
1) H. Kraemer; Die drei Bevölkerungsstufen, 1915, S. III. (Einleitung)  
2) Losch, Allg. St. Archiv. Jg. 9, 1915 S. 746. 3) Hansen, a. a. O. S. 265.  
4) Graunt, Observations. London 1676. Title-page.